

## 親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

# 「浄土—濁世を超えて、濁世に立つ—」 信ずるといふことは、<sup>まなこ</sup>眼の転換

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、第26回から第28回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。天親菩薩の『浄土論』を参照しつつ、第26回は「大乘」という課題について、第27回は「一切所求満足功德」について、第28回は「故我願生彼 阿弥陀仏国（かるがゆえに我、願わくは、かの阿弥陀仏国に生まれん）」という言葉について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、その第27回の問題提起からその一部を紹介する。（越部良一）

## ■ 信心という問題

『浄土論』に、「衆生所願楽 一切能満足（衆生の願楽するところ、一切よく満足す）」とあって、「一切所求満足功德」と呼ばれています。「願」も「楽」も願うことで、衆生が願う一切が満足する場所が浄土であると。実際には、われわれは、全然満足していないではないかと。絶対満足などあるはずがないと思っている、欲の骨頂であるような人間に、「一切所求満足」などと言っても、そんな話は虚偽だと。あるいは、理想の話などしたってしょうがない、もうちょっと身近な話を、というふうにしが見えないでしょう。

曇鸞は、「称名憶念あれども、無明なお存して所願を満てざるはいかん」（『浄土論註』）という問いを出しています。無碍光如来、阿弥陀仏の名を称えても、相変わず自分自身は無明であり、願いが満たされていない。しかし、それは名号の責任、如来の責任ではない。衆生の側に責任がある、と曇鸞は言います。ど

ういう責任かというときに、信心の問題だと言うのです。

信心という問題はやっかいで、なかなかわからないのですけれども、悟りということが、仏教一般を成り立たせてきた一つの大きな言葉であるし、目標である。そういう、悟りというのが中心の宗教とは、現世に、自分の体験内に、無限と一つとなる体験をもつということです。ところが、悩み多き、欲多き、しがらみ多き生活をしながら、そういう体験をもつことは、ほとんど不可能である。

それに対して、親鸞という人は、愚かであり、流転の生活をしていくしかないような人間、その人間が、本願によって、そこに、その生活のままに、悟りと同じ利益を得ると。だが、それは悟りではない。それを言い表す言葉は、言うならば、ないのだろうと思うのですが、それを、「聞其名号 信心歓喜」という『無量寿経』の言葉、つまり、「信心歓喜」という言葉のなかに見いだした。それは普通の、いわゆる信心ではない。普通言われるような信心というのは、自分に都合のよいことを宗教から取ってくるというかたちの、利用、依頼心があるのでしょうか。それは生死の問題といった自分の力を超えたもの、運命的なもの、それが自分に加勢するようにはたらいてほしいと頼む。自分を超えたような何かに頼む。言うならば、自分のエゴを消さずして、自分のなかに無限なるものを取り込もうという、そういう宗教との関わりです。

## ■ 臨終まっぺからず

ところが仏陀は、そういうものに依らない智慧というものを開くために苦勞された。そうい

う智慧は、一切衆生がその法に依って、その道理、真理に依ってたすかるものだと宣言された。それを、親鸞は求め求めて、本願の仏教で本当に出遇った。たすからない人間であるということ、もう、骨身に浸みて知っていて、しかも、たすかるという道を親鸞という人は発見した。これは、すごいことだと思うのです。

ではそれを、どういうふうに表示していくのかというときに、おそらく親鸞聖人も随分苦労されたと思うのです。言い過ぎれば、誤解される。言わなければ、せっかく本願に触れた歓びというものが伝わらない。せっかく歓んでいるのに、“やはり、救いは死んでから後か”というような話になったら、何のために、いま出遇っているのだと。いま念仏しておいて、貯めておいて、臨終に役立つぞというような、そんな根性で称えているのかと。そうではないのです。

親鸞聖人が、一念一念信心歓喜しているということは、その信心歓喜に救いがあるのです。その救いの意味は、「回向」でしょう。如来回向。如来が来てくださるのだと。無限は、有限の外にあるように見えるけれど、外ではない。有限を包んで、ここにはたらいっているのだということが、回向ということなのです。

その構造が難しいですね。真実信心と大涅槃のさとりととは、直に接している。接しているけれど、取り込んではないという関係で、いまを歓んでいけるということはどういうふうに言えるのか。ここを、親鸞聖人は、分限を押さえながら、しかし、あまり遠慮せずに積極的に言おうと。浄土教と言えば、死んでから後だというふうに思われているけれど、救いは死んでから後ではない。救いは現在にあり、臨終まつべからず（「臨終の称念をまつべからず」『尊号真像銘文』）、臨終が勝負だという宗教ではないのだと。

### ■ 清沢満之の言葉

では、いま、たすかったのならば、いま、お前は仏かと。そういう意味ではない。仏ではない。けれども、仏になる資格はあるのだと言うのです。資格があればそれでよい。仏になると

がんばらなくても、もうよいのだと。愚かで罪深い、哀しい身であるけれど、そのままに、無限なる慈悲が、ここにはたらいてきているという事実をいただければよいと。

これが、清沢満之先生の次の言葉（「臘扇記」）にもよく出ています。「請う勿れ、求むる勿れ、汝何の不足かある。若し不足ありと思わば是れ汝の不信にあらざるや」と。こう言わざるを得ないのは、やはり、欲しい、求めるといふ心が湧いてくるからです。けれども、それを「不信」と言っているのです。如来に対する絶対の信頼がないと。それは、如来に対しての反逆ではないかと。けれども、如来は衆生のそういう反逆も罪も、全部許そうと。しかし、「汝の苦惱を如何せん」。そうやって、一人でもがいているものを救うことはできないよと。勝手にもがいているのだよと。こういう表現です。

信ずるということは、眼の転換を言っているのです。私どもの発想の転換です。だから、こちらから信ずるのではない。如来回向の信心だと。如来から信じられていると。如来から与えられているということに、頷くしかない。どういう状況だからだめだとか、どういう状況なら良いという話ではなくて、どういう状況であろうとも、状況を否定媒介にしながら、絶対満足をそこにいただくという、そういう智慧が、本願の智慧として教えられているのではないかと思うのです。（文責：親鸞仏教センター）

### 「親鸞思想の解明」のご案内

どなたでも聴講（無料）いただけます。なお、11月5日は、下田正弘氏（東京大学大学院助教授）、菅原伸郎氏（元朝日新聞学芸部記者）をお招きし、「科学技術文明と現代の不安2—知によって覆い隠された世界と宗教—」と題したシンポジウムを開催します。

記

日時：2004年9月16日（休）午後6時30分～9時  
10月15日（金）同上  
11月5日（金）午後5時30分～9時  
場所：有楽町・東京国際フォーラムGブロック  
JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分